

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第173号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成25年9月21日

シジュウカラガン



2012. 11. 4 浦幌町

撮影者 高橋良直（札幌市手稲区）



も く じ

ナベコウ観察記	滝川市江部乙 中島 和治	2
宿泊探鳥会・天売島での稀少3種 —カラフトムシクイ、ムジセッカ、ヒメコウテンシー—	当別町 道川富美子	4
北海道大学構内におけるキマユムシクイの記録	北海道大学野鳥研究会 三ツ橋 圭	5
落石ネイチャークルーズ —アメリカウミスズメ—	札幌市手稲区 坂井 伍一	6
ねむろバードランドフェスティバル2013のご報告	酪農学園大学獣医学部獣医学科 5年 高木 佑基	7
旭岳温泉におけるジョウビタキのさえずり	札幌市中央区 川路 則友	10
谷口一芳・前会長を悼む	会 長 小堀 煌治	11
礼文島の鳥点描	札幌市中央区 白澤 昌彦	12
探鳥会ほうこく		12
探鳥会あんない		16
鳥民だより		16

ナベコウ観察記

滝川市江部乙 中島 和治

今年(2013年)4月28日(日)、コウノトリ科のナベコウが滝川市江部乙の休耕田に飛来しているのを発見し、撮影にも成功しました。これについては5月18日の北海道新聞朝刊(地方版)に掲載されましたが、ここでは状況説明を中心にご報告させていただきます。

江部乙は明治27年に屯田兵によって開拓され、40年ほど前に滝川市と合併した町です。地形的には滝川市の北半分を占め、石狩平野のやや北部に位置し、雨竜川が江部乙の中央部で石狩川に合流しています。平野部は水田地帯で、道内産米の種籾採種地(全道6箇所の一つ)として知られていますが、干拓の進んだ今も昔の石狩川大氾濫原の面影がわずかに残っており、湿地や三日月湖には春秋の渡りの

時期に多数のガンカモ類が飛来します。一方、緩やかな丘陵地は近年日本の菜の花畑が知られるようになりましたが、昔は余市に次ぐ北海道第2のリング生産地として知られておりました。今も畑の周りに防風林が残り、溜池が点在し、丘の正面に暑寒別岳や樺戸連山が聳え、眼下に石狩平野が一望できるパノラマの美しい風景が広がっています。最近、この一帯の丘巡りのフットパスが知られるようになり、“ほっかいどう100の道”(北海道新聞社創刊70周年記念事業)の一つに選定されて多くのウォーカーが訪れています。山麓方面の丸加高原周辺の「自然観察の森」には多くの夏鳥が営巣し、カラマツ採種園の交流の森(道有林)にはアオサギのコロニーなどが見られます。



ナベコウ 2013. 4. 28 滝川市江部乙

私の自宅は丘陵地にありますが、目の前の田んぼにハクチョウが餌をついばむ姿も普通に見られます。4月下旬は例年マガンやハクチョウはほとんど雪解けのさらに遅い雨竜川北部へ移動していることが多いのですが、今年は雪解けが遅れたために当日もわずかに居残っている群れが見られました。

前日は強風が吹き荒れ、当日の朝方に夜来の雨があがって、午後から薄日の射す穏やかな天候になっておりました。私はこの時期の日課として沼川を車で一回りしておりますが、自宅を出たのが午後2時過ぎのことで、いつものフィールドを何の期待も持たず車を走らせておりました。前日の嵐の影響だったに違いありませんが、怠慢な日常がひっくり返るような、信じられない光景を目にしたのです。

ナベコウを発見したのは江部乙西10丁目、国道12号とJR函館本線に挟まれたわずか300m幅の騒音の多い畑（水田の転作）の中です。私は国道から直進し、西側に位置するJR方面に向かって走行中で、太陽は南の左手、ナベコウは北の右手、順光の位置になります。西10丁目通りの300mの中間部、畑の奥行きは40～50m程度の距離だったように思います。全くの偶然ですが、（国道やJRがあり注意を要する）場所が場所だけに車のスピードが出ていない、しかも幅の狭い空間であったことが幸いしたに違いありません。安全で広い場所ならきっと見逃していたはずです。

非常に大きな、黒い、見たことのない鳥が畑の中にいます。一瞬ツルの仲間かと思いましたが、本当は何だろう？ 珍しい・・・、言いうのない興奮に襲われました。後でゆっくり調べればよいことですから、とりあえず写真に収めてしまいたいと焦りました。車を止め、エンジンを切り路上駐車です。幸いカメラで2～3枚記録することに成功しました。写真が撮れたことで気持ちが落ちつき、双眼鏡でゆっくり見ることにしました。先方はこちらに気付いているようすが、疲れているのか、人慣れしているのか分かりませんが、落ち着いている様子に見えます。少しも動かず佇んでいます。肉眼でもすらりとした均整のとれた美しい姿や嘴や足が赤いことが分かります。双眼鏡で見ると、頭部は緑がかった黒色、目元も赤いことが分かりました。しばらくたちどまったまま、餌を採る様子もなく休んでいる様子です。やはり疲れているのかもしれない。

ナベコウがいつからこの場所にいるのか分かりません。アオサギなら飛び去る距離でしょうが、許容範囲だったようで、私にも周りの様子を観る余裕が出来ました。元是水田で、細い水路とわずかに伸びた麦畑と菜種畑、それに真ん中に細いあぜ道が通っています。水辺の鳥が休むにしても餌を採る場所としても決して相応しい場所とは思われません。なぜこのような場所にいるのか？ また近くにカラスやアオサギがいます。ここは彼らの縄張りで、現に1羽のカラスがそばから離れる様子を見せません。また、観ているとアオサギが頭上を飛びました。たぶん飛来の当初から、これらの先住者から縄張りに侵入した異分子を追い払うべく直接間接の威嚇行動を受けたに違いないと思われます。

ナベコウには動じる気配はありませんが、迷い込んだ環境に困惑し次の行動を決めかねていたのではないかと思われる。

しばらくして、田の中や畦をゆっくり歩きはじめました。太く長い赤い足で、ゆっくり大腿でウォーキングし、下を向いて餌を探して歩く感じではなく、まっすぐに向いて歩いていきます。少しずつ私との距離をとり始めたように感じます。たまに飛翔するが、上昇して飛び去る様子ではなく、明らかに距離を稼ぐためのもののようです。遠ざかる姿に、また私は慌てました。カメラに収めることに集中しました。後ろ姿は足を除けば全身が黒色、横下腹にかなり大きな白い羽が目につき、飛翔すると腹部から下尾筒が白いが目立ちました。

車を移動し、国道と並行する西裏通りからしばらく観ることにしました。また2～3度飛翔して、しばらくして水路に入りました。頭だけ出ていますが、今度は餌を採る様子です。しかし捕食できたかどうか確認できませんでした。田の排水用の小さな水路ですから常連のアオサギならいざしらず、よそ者には容易な環境ではないと思われます。

結局、疲れが取れたのかもしれませんが、よい餌場がない、先ほどからウザイ奴が見張っていることに嫌気がさしたのでしょう。大きく羽ばたいて上昇し南(滝川)方面に姿を消しました。午後3時ごろのことでした。約30分間、車外に出ることなく観察することが出来ました。

聞くとところによると、これまでに道内でのナベコウの記録は1983年9月7日の根室での1例のみとのことです（高田令子、2001、根室支庁管内鳥類リスト、根室市博物館開設準備室紀要第5号）。でも、これには写真や詳しい記載がなく、はっきりとした記録は今回が初めてのようです。

余談ですが、平成15年（2003年）3月23日、新十津川の袋地沼でペリカンを発見撮影したことを思い出しました。また昨年秋の旭山動物園から逃げ出したフラミンゴの例もあって、今日の前にいる鳥は何者なのか、と思いました。帰宅して、コウノトリの仲間のナベコウであることを知りましたが、国内動物園にはいないらしいので、正真正銘の野鳥でありましょう。渡りの途中に迷い込んできたものに違いありませんが、大きな目立つ鳥なので、必ず道内の他地域においても観察されているはずと思っておりましたが、関連した情報はなかったのでしょうか？

世に不思議なことがあるものだといまだ半信半疑の思いでいっぱいです。珍鳥のナベコウがここ江部乙に忽然と天上から飛来し、余人に知られることなく舞い去ったのだとしたら、偶然以上の、まさに奇跡といわなくてはなりません。これから普通に見られる時代になるのかどうかは分かりませんが、当地の豊かな自然の1ページを飾るビッグなニュースになりました。このような幸運を与えてくれた天の配剤に深く感謝し、また「北海道野鳥だより」の読者の方々に珍しい記録をご紹介出来ることを光栄に思う次第です。

宿泊探鳥会・天売島での稀少3種 —カラフトムシクイ、ムジセッカ、ヒメコウテンシ—

当別町 道 川 富美子

宿泊探鳥会は初日から強い風と雨。羽幌港の防波堤を超えてくる高波を見ながら何時間もフェリー出航を待ちましたが、欠航。羽幌に1泊し、翌日は焼尻島行きを無しにして天売島へ向かうことになり、担当探鳥幹事さん大苦勞の末、分散して宿泊、夕食も3ヶ所に分かれてとることになりました。

翌5月4日も冷たい小雨が降ったり止んだり。大揺れの高速船で渡り、まずバスで島内一周。

炭火海鮮番屋で昼食の後、裏手の坂を登り切ったところにある愛鳥公園で小休止。脇のほうでおしゃべりしていた時、針葉樹の中に小さい鳥影が見え、黄色がチラチラしたので「キクイタダギがいるよ。」と言っていたら、葉陰から出てきて小枝に止まる。見下ろしだったので頭中央線がハッキリ見え、「センダイムシクイだったね。」と。「う?ん、黄色っぽいセンダイムシクイね。なんだか小さくない?かわいい!」とかなんとか言っているうちに飛び去ってしまいました。帰宅してから図鑑を開き、それがカラフトムシクイだったとわかりました(写真1)。



写真1. カラフトムシクイ 2013. 5. 4 筆者撮影

カラフトムシクイの判りやすい特徴は、細くて黄色い頭中央線と太くて長い黄色の眉斑、眉斑は額でつながる、黒っぽい過眼線、翼に太くて目立つ2本の黄色い翼帯がある、腰が四角く黄色、など。日本で見られるムシクイ類では最も小さいということや、針葉樹にいたことと好みの生息環境が針葉樹林や混交林ということも一致しました。

この日は、ダントツの要望があったヤツガシラが住宅地で出現し、皆が大満足の日になりました。

その翌日、5月5日はもう最終日です。前日タカブシギがいたパークゴルフ場そばの側溝を“ヤナギの下にドジョウ”を狙って覗いてみたとのこと。その時いた1羽を、弱

い光の中、皆センダイムシクイと思ったそうで、それがムジセッカでした。

後日、北川博一さんが写真整理をされていて、最初は色合いなどからセンダイムシクイではなくウグイスの雌ではと思われたそうです。しかし、寺沢孝毅さんの野鳥講座をヒントに、写真の鳥には体が小さく、尾が短めで、顔が赤っぽいなどの特徴が見られたことからムジセッカではないかと気づき、幹事さんに連絡されたそうです。北川さんは前日にも同じ場所でムジセッカを見てウグイスと思って写真を撮られており、その時の写真が今回の決め手になりました(写真2)。



写真2. ムジセッカ 2013. 5. 4 北川博一さん撮影

ムジセッカのその他の判りやすい特徴は、眉斑は目先で細く、明瞭で汚白色、眼の後方では淡いパフ色で輪郭はぼやける、過眼線は黒褐色、など。越冬地での生息環境は平地や水辺近くの藪、アシ原、灌木林などということで、観察した場所の環境とも一致しました。

探鳥時間も残り少なくなった頃、海側に草地に囲まれた



写真3. ヒメコウテンシ 2013. 5. 5 高橋良直さん撮影

ヘリポートがあり、何人かが立ち寄ってみました。その時、少し離れたアスファルトの上に1羽の鳥が降りましたが、なんだかわかりません。ヒバリに似て羽色はより淡く、またアオジやホオアカとかの雌でもないしで、「な?に?。」と言っているうちに草地の向こうへ飛び去ってしまいました。その後、高橋良直さんの写真でヒメコウテンシとわかり、帰りのバスの中で行った鳥合わせに間に合いました(写真3)。

ヒメコウテンシの判りやすい特徴は、ヒバリより小さく、嘴は太く短い、眉斑は淡色で、眼のまわりも淡色でアイリ

ング状、頭部から背、肩羽の軸斑は黒褐色で縦斑状に見える、など。好みの生息環境が、海岸、草原、農耕地などの開けたところということで、観察した場所の環境と一致しました。

カラフトムシクイ、ムジセッカ、ヒメコウテンシはいずれも数少ない旅鳥で、おもに渡り期、日本海側の島嶼で記録されています。5月初旬の天売島を探鳥先を選び、1日半で3種も記録できたのは幸運だったのでしょうか。

悪天候から始まりましたが、ことさら思い出深い宿泊探鳥会となりました。

北海道大学構内におけるキマユムシクイの記録

北海道大学野鳥研究会 三ツ橋 圭

2013年5月10日に札幌市中心部の北海道大学の構内にて、北海道では希な旅鳥であるキマユムシクイとみなされる鳥を観察することが出来ました。第一発見者は北大野鳥研究会OBの鈴木祐太郎さんで、ムシクイの仲間であることは確かだけれども、大雨覆と中雨覆先端の2本の明瞭な白帯(翼帯)が確認できたことから、この鳥がオオムシクイ(旧亜種コメボムシクイ)やエゾムシクイ、センダイムシクイのようなメジャーなムシクイ類とは異なりカラフトムシクイかキマユムシクイのどちらかであるということを判断したと言います。その後、鈴木さんの連絡を受けて薮原佑樹さん、島崎敦さん、青木大輔さんに私を含めた北大野鳥研関係者5名でこの鳥を観察しました。ここでは5名を代表して私が報告させていただきます。

私が到着したときにはすでにこの鳥は樹の高いところに移動しており、はっきりとした翼帯は1本しか確認することが出来ませんでした。しかし、その体サイズはまわりにいたセンダイムシクイと比較しても明らかに小さくキクイタダキ程度で、体型もほっそりとしておりとても体重が軽そうな印象を受けました。動きは俊敏で写真を撮るのもま

まならない程で、残念ながら私はまともな写真を撮影することが出来ませんでした。しかし、キクイタダキのように針葉樹の葉の間でちょこまか動くのではなく、まだ葉の茂っていない落葉広葉樹の枝から枝へと飛び移っていたため、発見はそれほど難しくはなく、ひっきりなしにチーチューチューと聞こえる複雑なさえずりを響かせていました。

さて、前述のように翼帯が明瞭に2本見られたということから、該当種はカラフトムシクイかキマユムシクイの2種に絞ることが出来ます。カラフトムシクイは、眉斑の黄色みが強く前部が太いため、左右の眉斑が額でつながる傾向があり、明瞭な黄色の頭央線があります。頬もかなり黄色みが強く、顔面一帯が黄色く見えます。また、腰が黄色く羽ばたいたときに目立ちます。また、チョイチョイチョイなどと太い声でさえずります。しかし、私たちが観察した個体は眉斑や顔面に黄色みは見られませんでした。また、羽ばたいたときに腰の黄色部も見られませんでした。さらに、カラフトムシクイとは明らかに違う声で連続的にさえずっていました。よって、私たちはこの鳥をキマユムシクイであると同定しました。

北海道鳥類目録改訂4版(藤巻裕蔵 2012、極東鳥類研究会・美唄)には、北海道でのキマユムシクイの記録は1992年10月の天売島、1989年5月の稚内の2例しか載せられていません。また、2008年10月に北広島市富ヶ丘で観察・撮影されておりますが、これは未発表とのこと(先崎氏からの私信)。キマユムシクイは識別が難しいことありますが、極めて希にしか見られない種のようなのです。

春の渡りの時期には思いがけない渡り鳥がふらっと北大構内に出現することがあります。北大にはまとまった数の樹木が生えており、渡り鳥の羽休め場となっているのだと思います。そのような意味で北大は陸にありながら離島のような環境で春の渡りを楽しめる場だと感じ、身近にこのようなフィールドがあることを幸せに思います。



キマユムシクイ 2013. 5. 10 鈴木祐太郎さん撮影

落石ネイチャークルーズ —アメリカウミスズメ—

札幌市手稲区 坂井 伍一

落石ネイチャークルーズは、落石ネイチャークルーズ協議会が行う漁船を利用して根室市の落石漁港からユルリ・モユルリ島海域を回り、また落石漁港に戻る2時間30分の海鳥ウォッチングです。

平成23年7月に本会の宿泊探鳥会で利用し、ミズナギドリの大群、ケイマフリなどのほか、エトピリカが比較的近くに姿を現したことも記憶に新しいところです。

ツノメドリが出ているとの情報があったので、中富良野町の大吉五夫・信子ご夫妻に同行させていただき、7月11日(木)に妻と一緒に参加してきました。

当日の乗客は本州から来られた男性を含めて5名、ガイドは根室市観光協会の「バードウォッチング観光振興アドバイザー」である新谷耕司氏でした。

9時に出船、天候は霧が発生し、うねりもあってあまり良い条件ではありませんでしたが、漁港を出ると間もなくウトウの大群が現れ、幸先のよいスタートとなりました。その後、船の近くまでやってくるフルマカモメを観察しながら、ユルリ島の近くまでくると霧がはれ、遠くではありましたが、エトピリカやケイマフリが海面に浮いているのが見られ、また飛んでいる姿も観察されました。エトピリカは、ざっと数えたところ30羽以上が確認され、時間切れ間近には20mほどの至近距離でも観察することができました。

また、港に戻る際には、防波堤に営巣している、オオセグロカモメ親子のほほえましい姿も見ることができ、大満足のクルージングでした。

残念ながら、ツノメドリに会うことはできませんでしたが、今回のクルーズで最大の収穫は、アメリカウミスズメ(学名：*Ptychoramphus aleuticus*、英名：Cassin's Auklet)に遭遇したことです(写真1)。

落石漁港を出て40分ほど過ぎ、ユルリ島の手前付近を



写真1. アメリカウミスズメ 2013. 7. 11

航行していたところ、船尾左舷方向から回り込むように飛んできて、船の右舷横に着水した海鳥がいました。飛んでいるときはウミスズメかなと思い、着水した側に移動し、観察したところ、虹彩の白さが目立ったので、慌てて写真撮影を行いました。コウミスズメを想定したのですが、体全体が黒く、コウミスズメの特徴である肩羽の白い部分が見られませんでした。

大吉氏、新谷氏も同時に撮影され、お互いに画像を確認したところ、新谷氏からアメリカウミスズメではないかとの説明、判断があり、画像と「海鳥識別ハンドブック(箕輪義隆著)」を見比べると目の上の白斑があり、ハンドブックに似ている個体であることが確認できました。この個体は、15分ほどの間に3度姿を見せてくれましたが、移動時間がきたので、その場を離れました。

自宅に戻り、画像をパソコンに取り込み、拡大し確認したところ、嘴は太く、先端が尖っている、下嘴の基部に淡色部分がある、腹と下尾筒は白い、足は黒い特徴があり、ハンドブックに記載されている特徴と同一であると確信し



写真2. 虹彩が白色 眼の上に白色斑 嘴が太くて先が尖る 下嘴基部が淡色



写真3. 体全体が黒褐色 足は黒色



写真4. 腹から下尾筒にかけて白色

ました(写真2~4)。

なお、新谷氏からはハンドブックの著者並びに複数の専門家から同定していただいた旨の連絡をいただきました。

アメリカウミスズメは、アリューシャン列島から北アメリカの北西部で繁殖し周辺海域で周年生息しており、日本鳥学会で日本産鳥類記録員と鳥類目録編集委員をされている池長裕史氏によると国内では以下の観察記録があるとのこと。

(1) 1997年1月10日 根室市納沙布岬沖でFrank Lambert & Jonathan Eamesによる観察記録がある(高田令子、

2001.根室支庁管内鳥類リスト、根室市博物館準備室紀要15:95-114)。

(2) 2005年3月19日 大洗—苫小牧航路で深川正夫氏により本種と思われる写真が撮影されている(未発表記録)。

(3) 2013年2月9日 八戸—苫小牧航路で白石昭彦氏により本種と思われる小型ウミスズメが撮影されている(未発表記録)。

また、日本鳥類目録改訂第7版では検討中の種・亜種として記載があります。

クルージングによる海鳥の観察は、野鳥たちが比較的近くまでやってくることから、フルマカモメが出す油のようなおいを感じることができると、その特徴が判り、結構楽しめるものです。また今回のように思いがけない出会いもあります。興味のある方は是非参加してみたいかがでしょうか。

札幌近郊では勇払マリーナから出る苫小牧沖クルージングもあります。昨年は何度か計画・実施し、ハシジロアビ、クロアシアホウドリ、トウゾクカモメなどを間近で見ることができました(苫小牧沖クルージングについては、平成22年6月21日発行野鳥だより第160号参照)。

最後に今回のアメリカウミスズメの観察記録について、発見者の大吉五夫氏、同種の解説、同定についてご尽力いただいた新谷耕司氏に深く感謝申し上げます。

ねむろバードランドフェスティバル2013のご報告

酪農学園大学獣医学部獣医学科5年 高木 佑基

2013年2月に北海道の根室半島およびその周囲で開催されたねむろバードランドフェスティバル2013に参加しましたので、ご報告いたします。

私たちは酪農学園大学で主に野生動物などを主なテーマとして研究を行っています。しかし、獣医学において野生動物を研究しているにもかかわらず、実際に野外で野生動物を観察する機会をもつてこなかったのが現状でした。そのような現状を受けて、実際に野外での観察のトレーニングの一環として本大会に参加することとしました。

根室半島には野生の動植物も多く見られ、特に鳥類は日本で記録がある鳥類約630種のうち約360種以上の記録があるといわれております。また、希少種のオオワシやオジロワシの越冬地としても世界的に重要な拠点となっております。

本大会は上記のような地域の特性を活かして根室を訪れる観光客や市民を対象としてバードウォッチングを主体とした観光振興、根室やバードウォッチングに興味を持ってもらうこと、野鳥関連の募金などを目的として、根室市や同市の観光協会、ネイチャーセンター、その他協賛企業な

どが一丸となって、2008年より継続開催されています。6回目にあたる今年は2月16、17日の2日間の日程で開催されました。今年の大会は主にオオワシの探鳥会や森林や漁港をめぐるバスツアー、クルーズ、バードソン、また斎藤慶輔獣医師(猛禽類医学研究所代表)によるオオワシに関連した講演会等で構成されています。今回、私たちは5人(筆者他、同学科5年 秋葉悠希、牛山喜偉、斎藤真一、同学科6年 平山琢朗)ですべてのプログラムに参加登録しました。

大会参加に際し、一番の問題は私たちの野鳥の知識のなさで、5名のうち2名がバードウォッチングの経験がほとんどなく、調査等で野鳥観察の経験があるのは1名のみという状況でしたので、大会に先んじて前々日の14日に事前学習を行うこととしました。事前学習では望遠鏡の使い方から、根室で観察される野鳥のリストから冬季に観察記録のある種、約140種の鑑別ポイントに関して行いました。その事前学習の講師を行ったのは実は私自身で、大学周囲でのバードウォッチングの経験はそれなりにあったのですが、我が酪農学園大学に隣接する野幌森林公園は内陸に位

置するため、スズメ目を中心とした森林性の野鳥が主な観察対象となっていました。そのため、根室のようなカモ類や海鳥、また草原性の野鳥に関しては知識が乏しく、私自身や私の周囲のバードウォッチャーも見たことのない野鳥に関してレクチャーを行うという状況にならざるを得ませんでした。

非常に不安の残るレクチャーを行った後、大会が16日の9時から予定されていた為、前日の15日17時に集合、18時前に根室に向けて出発し、翌朝の6時にバードランドフェスティバルの本部が置かれている道の駅スワン44に到着しました（写真1）。その後、9時からバードソン



写真1. 道の駅に飾ってあるオオワシの本剥製と筆者

の開会式があり、10時に競技開始となりました。バードソンの参加者は10チーム（1チーム2名構成）計20名で、道東からの参加者が8チーム、私たちが江別からで1チーム、道外の神奈川から1チームと、やはり根室市周辺からの参加がほとんどでした。また、年齢的には上は70代2人組のチームから、下は私たち20代前半の2人組と一見幅広いようにも思えますが、私たちの参加が本バードソンの初めての学生の参加であり、あまり若い方々の参加者は歴代いなかったようでした。

競技開始後、開会式の行われた道の駅の周辺で観察を開始。この道の駅は風蓮湖という汽水湖を一望できるとともに周囲を針広混交林に囲まれていました。特に、風蓮湖では結氷した氷に穴をあけて網を仕掛ける氷下待ち網漁が行われており、その雑魚に群がるオオワシやオジロワシといった猛禽類を観察できるといった場所でした。しかし、当日は雪もちらついており、観察は困難を極めました。その道の駅の周辺ではハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒガラ、ハシブトガラ、オオワシ（幼鳥、成鳥）、オジロワシ（幼鳥、成鳥）を観察できました。特にオジロワシ、オオワシは個体数の減少を感じさせないくらいに雄大な姿で飛翔しているのが印象的でした。

その後、春国岱ネイチャーセンターに向かいセンターの周辺の森林、またセンターのフィーダーに集まる小鳥や窓

から一望できる海岸に集まる海鳥の観察を行いました。ここではシジュウカラ、ゴジュウカラ、シメ、ハシブトガラ、オオアカゲラ、スズメ、トビ、ノスリ、シロカモメを観察できました。特にカモメ類に関しては事前学習の際に成鳥に関してであれば全員同定できるくらいになっていましたので、各自思い思いに望遠鏡で観察を行っていました。

次に市民の森という、草原と森林が混在している観察場所に行き、ウソ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラ、ヒガラ、コゲラ、ツグミを観察したところで、本大会のメインの一つである納沙布バスツアーという根室の野鳥観察ポイントを巡りつつ野鳥を観察するツアーに参加しました。このツアーでは海鳥の観察を中心として温根元漁港、納沙布岬、歯舞漁港を巡りました。最初の観察地点である温根元漁港に向かうまでの車中でオホーツク海の流水を背景にオジロワシやオオワシ、ワタリガラスを、また流水の波間にはシノリガモやクロガモを観察することができました。

その後、温根元漁港ではウミアイサ、カワアイサ、コオリガモ、スズガモ、ホオジロガモといったカモ類とオオセグロカモメを、また、納沙布岬では北海道本土最東端の寒風が吹きすさむ中、クロガモ、シノリガモ、アカエリカイツブリ、ミミカイツブリ、ヒメウ、ウミガラス、ウミスズメ、コウミスズメ、ケイマフリ、ワシカモメを観察することができました。納沙布岬の吹雪の中、観察ができたのはハイドのおかげでした（写真2）。ハイドとはその名の通り、



写真2. 市民の森に設置されている観察小屋「ハイド」

野鳥の観察の際に人が隠れる場所で、日本語では野鳥観察舎といいます。根室市では「バードウォッチング観光推進事業」の一環として現在は5箇所を設置されており、納沙布岬のハイドは2012年に設置されました。ハイドには地面から1m程の高さのところに縦30cm程の窓が開いており、鳥類では人間の下半身が見えると警戒心が高まるといった性質から、下半身を見せずストレスを与えないように観察を行うことを目的として、イギリスから導入されました。

納沙布岬のハイドの中からの観察を終えた後、歯舞漁港

に向かいクロガモ、ビロードキンクロ、コオリガモ、スズガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カワアイサ、ヒメウ、ワシカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、オオワシを観察して15時30分ごろにバスツアーを終えました。

さすがは北海道本土の最東端だけはあって日暮れも早く、バスツアー終了時には日は大きく傾いていましたが、一日の最後にもう一度ネイチャーセンターに戻り、スズメとゴジュウカラ、シジュウカラ、アカゲラをフィーダーにて観察して16時に一日の観察を終えました。

一日目の観察は終わりましたが、バードランドフェスティバルのプログラム自体は終わっておらず、夜には道の駅スワン44にて斎藤獣医師による講演会に参加しました。講演会は「オオワシとの共存を目指して～北海道とサハリンにおけるオオワシの現状と課題～」という表題でオオワシを取り巻くサハリンでの石油と天然ガス採掘がオオワシに与える影響や、日本における鉛中毒やエゾシカのロードキル個体の放置による二次的な大型猛禽類のロードキルの現状を多くの写真や図表などを用いてお話くださいました。特にロードキルに関しては北海道という車や汽車・電車が交通の要になっている社会で生きる身としてはオオワシ、オジロワシ、またタンチョウなどの事故死に関して改めて考えさせられました。また、印象的だったお話は鉛中毒に関して、エゾシカの野山に放置される遺体にも鉛が含まれていなかったら、大型猛禽類にとっては冬の間の優良な餌資源となるというお話は、当然のことではあるのですが、改めて気がつかされました。

この講演をもってねむろバードランドフェスティバルの初日の全プログラムが終了したのですが、初日終了時に観察できた種数は38種。しかし、私個人としては種数云々よりも、事前学習の不安をよそに、同行してくれた初心者バードウォッチャーが、一日の最後には比較的わかりやすいカモ類のオスや、興味をそそられ易い猛禽類のみではなく、カモメ類、キツツキ類、スズメ類などの同定もできるようになり、自分も辟易とするような吹雪の中での観察でも楽しんで鳥を見てくれていたことが何よりも喜ばしいことでした。

二日目は初日から一転して風もなく快晴で、絶好の観察日和でしたが、前日からの北風の影響で根室半島沿岸には流氷が大量に接岸していました。そのため、事前に申し込んでいたプログラムのひとつである野鳥観察のクルージングは欠航になってしまい、外海での観察は不可能になってしまいました。二日目の最初は6時30分から2時間ほど、初日にも行った市民の森にて観察を行いました。市民の森は2月ということもあって腰ほどにも積もった雪をかき分けながらの観察になりましたが、スズメ目を中心にゴジュウカラやシジュウカラといったカラ類、アカゲラ、コゲラ、ツグミ、キバシリ、カワラヒワ等を確認できました。その後は、海鳥を観察するために花咲漁港や納沙布岬、温音別

漁港などを巡ってヒドリガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモといったカモ類や、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメなどのカモメ類、ウミスズメやコウミスズメといった海鳥などを観察して、14時に二日目の観察を終了しました。

観察を終えた後、道の駅にてバードソンに参加した全10チームの観察結果の種数と種数上位チームの表彰が行われて、閉会となりました。1位のチームは50種、私たちは45種で2位という結果でした。それに応じて少額ではありますが大会の主催である根室観光協会へ募金をさせていただきました(写真3)。募金は全額、猛禽類医学研究所に送られるそうです。



写真3 表彰式後の記念撮影 左から秋葉悠希、平山琢朗、高木佑基、斎藤真一、牛山喜偉は撮影時不在

今回、ねむろバードランドフェスティバルに参加して、私たちの当初の目的であった野外観察のトレーニングは達成されたと思います。バードウォッチング経験が皆無であった二人も、最後には多くの鳥の同定ができるようになり、本大会終了後も定期的にバードウォッチングをしたいと言っていました。また、本大会に参加して気になった点の一つが参加者の年齢層についてです。バードソン含め、他のプログラムに関しても平均年齢が高いという点。ほとんどの場所、プログラムで私たちが最年少で、40、50代以上の方が大半を占めているという状況でした。また、バードソンに関しても歴代で学生の参加が初という点もそのことを顕著に表していると思います。確かに根室という簡単には行くことができない場所での開催という点はあるのですが、もっと若年層の参加者増加が図られるような広報活動や、学生に興味をもってもらうような工夫が必要になってくると感じました。来年の2月にも同地区で同様の大会が催される予定になっていますので、小旅行気分ですぐ観察をしない地域で観察を行ってはいかがでしょうか。

旭岳温泉におけるジョウビタキのさえずり

札幌市中央区 川 路 則 友

ジョウビタキは北海道では数少ない冬鳥として知られています（日本鳥学会 2012、藤巻 2012）。私も本州や九州に住んでいた時分は、典型的な冬鳥として都市部の人家の庭先にも普通に現れ、くるくるっとした可愛い眼や尾羽を小刻みにふるわせる仕草がずいぶん心を和ませたものです。しかし札幌に通算10年以上住んでいますが、これまでまったく見たことがありませんでした。ところが、今年6月10日に旭岳温泉を訪れた際に、なんとさえずっているオスを確認しました。夏場における本種の観察例は貴重と思い、以下に報告します。

観察日時：2013年6月10日4:40am~5:00am

観察場所：旭岳ビジターセンター前のホテル敷地内
(上川郡東川町)

観察個体：ジョウビタキ（オス）

個 体 数：1羽

観察状況：最初にホテル駐車場に止められた車の間をヒラヒラと飛び回るジョウビタキオスを発見。そののちどこかに行ってしまったが、しばらくしてどこからか今まで聞いたことのない、ホオジロに似たやや複雑なさえずりが聞こえた。そこで声の主を探したところ、ホテル横にある高さ約20mのエゾマツの頂点で同じ個体と思われるジョウビタキのオス1羽がさえずっていた。約3分間のさえずりののち、3mほど離れた同じく高さ20mほどのエゾマツの頂点で、ふたたびさえずった。そこで1分間ほどのさえずりを終えたあと、ホテルの裏手にあるダケカンバ林の方に移り、その中でも時折りさえずっているのが聞こえた。姿を撮影することはできなかったが、さえずりは録音できた。

残念ながら、その後、同行者と別の場所での探鳥のためにその場を離れたために、それ以降の状況は不明です(*)。

ジョウビタキは、これまでにわずかながら北海道や長野県で繁殖例が知られています。北海道では、1983年に上士幌町糠平市街でわが国初の繁殖が報告されました（松田ら 1983）。それによると、同年4月29日に木造家屋の内部の棚上での造巣が確認され、6月11日には5羽のヒナが巣立ったとのことです。その後、日本で2回目の繁殖例が長野県で記録されたという新聞記事が出ました。それによると、2010年6月下旬に長野県富士見町の標高1,300mにある別荘地の近くの山林で5羽の雛に給餌するつがいのジョウビタキ親鳥が発見されたということで、その写真が掲載されました（同年8月5日付け信濃毎日新聞ほか）。

ただ、川辺（2013）によれば、1999年に大雪山白雲岳頂上で餌運びをする個体が観察されたことがあるとのことで、実はこれが2回目の繁殖例になるようです。さらに、今度は上川町で繁殖例が写真付きで北海道新聞に掲載されています。2012年5月中旬に上川町内の空き家の屋根裏に営巣し、6月3日にはヒナが無事巣立ったとのことです。新聞には雛に給餌する親鳥の写真が掲載されました（同年6月8日付けおよび6月17日付け北海道新聞）。さらに驚くことに、そこでは同年7月25日に同じつがいが、1回目の営巣場所から約100m離れた店舗の屋根裏で2回目の繁殖を行っているのが確認され、8月8日にはヒナが無事巣立ちましたが、そのヒナの写真がふたたび新聞に掲載されました（8月22日付け北海道新聞）。同新聞記事によると、巣を発見した井上武美さんは「昨年も親鳥を見たので注意していた」とのコメントを寄せています。したがってわが国でのジョウビタキの繁殖例は上記の4例ということです。

これまでも繁殖期にジョウビタキが観察されたという例は本州以南でもいくつかあります。前述の松田ら（1983）によれば、米子市（1974年）や鳥取市（1975年）で、また蒲谷（1996）には栃木県で夏に記録されたという例が書かれています。ただ、今回私がさえずり行動を観察した例は、大雪山周辺地帯ということ、時期が6月上旬ということもあり、営巣は確認されていないものの同所で繁殖している可能性は大きいと思われました。川辺（2013）によれば、糠平で最初の繁殖が確認される前年に独身オスが滞在し、さえずり続けていたとのことで、さらに同地ではその後も1984年、1994年、2003年、2010年にペアもしくはオス単独で滞在していた記録があるようです。これらの例から考えると、大雪山周辺では、毎年どこかで繁殖しているのではないかと思わせるような状況に徐々になっているようですし、今回の旭岳温泉のさえずり個体も、もし独身オスだったとしても、いずれ繁殖する可能性が大きいと思われそうです。

長野県の例でもあったように、別荘地とその周辺に林があるという風景は、旭岳温泉にも類似します。同温泉地の標高は1,000mほどですが、今年の北海道における春先はいつまでも低気温状態が続き、全道各地で夏鳥の渡来がかなり遅れました。したがって、本来の繁殖地である朝鮮半島北部、ロシア沿海地方の通常の気温や環境にかなり類似した状況をもたらしていたのではないかと思われそうです。山階（1980）によれば、繁殖地である朝鮮半島金剛山では5、6月頃、高いチョウセンゴヨウの梢の頂点に静止してさえずり続けるのを多く見るとのことです。これも今回

の状況に酷似します。

終わりに、今回のさえずり確認に同行いただいた鹿児島県在住の溝口文男氏、ジョウビタキ繁殖記録等について貴重な情報をいただいた藤巻裕蔵氏、川辺百樹氏、磯 清志氏、柳田和美氏、樋口孝城氏に心から御礼申し上げます。

文 献

藤巻裕蔵 (2012) 北海道鳥類目録改訂 4 版. 極東鳥類研究会. 美唄.

蒲谷鶴彦 (1996) ジョウビタキ. CD Books 日本野鳥大鑑 鳴き声333 (下) : 44-45.

川辺百樹 (2013) ジョウビタキの日本列島への進出. 北海道自然史研究会2012年度大会 : 9

松田まゆみほか (1983) わが国におけるジョウビタキの繁殖初記録. 鳥 32:175

日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第 7 版. 日本鳥学会. 三田.

山階芳麿 (1980) 日本の鳥類とその生態 第二巻. 出版科学研究所. 東京.

* : 後日、磯 清志氏の話によると、我々がジョウビタキを観察した前日 (6 月 9 日) にもその近くでジョウビタキの写真が撮影されたということです。また磯氏は約 1 週間後の 6 月 16 日に同地で調査を行うも、ジョウビタキは観察されなかったとのことでした。

谷口一芳・前会長を悼む

会 長 小 堀 煌 治

谷口一芳前会長が 7 月 17 日肺炎のため逝去されました。94 歳でした。後日、役員 3 人でお宅に伺いご仏前に線香をあげさせてもらいました。

ご家族によると、谷口さんは今年も元気で絵筆をとり 6 月の全道展にも出品されました。その後室内で転倒、骨折し入院中に肺炎を発病されました。

谷口さんは「北海道野鳥愛護会」設立にも尽力されました。設立には道庁の林政課の人たちが中心となり準備を進めましたが、谷口さんは当時、後志支庁の林務課長、設立時には「参与」として役員に名を連ねています。その後道庁林務部に移られ、定年後は道緑化推進委員会に勤務されましたが、この間、誕生間もない愛護会の揺籃期を支えてこられました。よく道緑化推進委員会の事務所をお借りして会議を開いていたものです。

初めてお会いしたのは私が幹事を仰せつかってからでした。話し易く明るいお人柄でしたが、会議ではいつもまとめ役、理路整然、細部にも目配りが効き、まさに能吏という印象でした。芸術家の側面を知ったのはしばらく経って

からです。「野鳥だより」のカットなどを時々拝見し、素人離れた作品に感心していたのですが、実は知人ぞ知る現役の洋画家でもあったのです。まさに「二刀流」を実行されていました。

谷口さんは札幌洋画研究所で絵を学び、全道展、春陽会に初出展で初当選。資格を得ることが難しい全道展の会員、中央画壇の春陽展の会員にもなりました。初期の頃に描かれた道庁や五番館などレンガの建物の作品が強く印象に残っていますが、後年は個展などでフクロウをモチーフにした大作を見せてもらいました。奥様と一緒に愛護会の観察会にもよく参加されていましたが、フクロウに魅せられ、遂にシロフクロウを観るためにアラスカにまで出かけられたそうです。

谷口さんは幹事、副会長を長く務めた後、平成 11 年には会長に就任され 3 年間お世話になりました。描きためた多くの遺作は道立近代美術館、小川原脩記念美術館 (倶知安町) に收藏されたとのこと、これからもきっとお目にかかる機会があるでしょう。谷口さんがデザインされた愛護会のシンボルマークで、野鳥だよりの目次にも長年使われてきているフクロウは永く残ることでしょう。長い間ありがとうございました。心からご冥福をお祈りします。



谷口前会長が描いたフクロウの絵 (元はカラー) と野鳥だより用のカット絵

礼文島の鳥点描

札幌市中央区 白澤 昌彦

日本最北の離島の礼文島は、花の浮島と呼ばれるように花の種類が豊富なことから、以前から一度は行ってみたいと思っていました。自由な時間が持てるようになり、アツモリソウを見に平成25年6月10日から2泊してきました。島全体は穏やかな丘が多く歩いていても気持ちの良い小道で、花を見ながら、そして沖縄の海のような色と景色は晴天であったこともあり、素晴らしいものでした。

花見の旅とはいえ、やはりどんな鳥がいるのか気になるもので、気のついた点をお話しします。

早朝、町役場に近い旅館を出て、裏手の学校敷地を散歩していたところ、ウソの番いがタンポポの綿毛についている種子を食べているのを見ました。ウソをこの時期に平地の市街地で見られるとは、さすが最北の島という感じです。そして住宅地と隣合わせの学校敷地内でノゴマが小枝の先で囀っていました(写真)。札幌あたりで見られる環境とは全く違う環境での観察、さすがと言うか驚きです。

ゴロタ岬という岬へ行く途中に、30羽ほどのアマツバメが飛び交っていました。アマツバメは雨が降りそうなどきによく飛ぶことに因んでこの名がついたとされていますが、青空の中でジュリリリと鳴きながらすごいスピードで飛んでいました。そのうちに、急に上空1か所に鳥が集まりだし、激しく鳴き交わし、争いごとをしているかのように鳥同士が接近していました。こんな行動を何度か繰り返しておりましたので、何の行動なのか調べてみましたが、飛翔しながら睡眠を取ったり交尾をしたりするとのこと、群れから一瞬離れて追尾行動をする個体もありましたので繁殖行動であったのかもしれません。

次の日の早朝は桃岩という岩が見える所まで歩いてみま

したら、コマドリが頻繁に鳴いており、利尻島と同様に豊富なことを感じましたが、姿はみられませんでした。また、エゾセンニュウの姿を久々に見ることが出来ましたし、山道でクロジのさえずりも聞くことができました。



ノゴマ 2013. 6. 11 礼文島

札幌に帰る途中、豊富町のサロベツ湿原センターに立ち寄り、木道を歩いておりましたら、聞きなれない声、見慣れない姿の鳥が遠くにいました。何だろうと頭をひねっていましたが、先に進むと写真を撮っている人がおり、そこで改めて見て、シマアオジだと気付きました。もう何年も見ていないので私のアタマから忘れ去られてしまった鳥となったことは大変悲しいことです。

今回の花見の旅では、本会の幹事をされている道場さんにいろいろとお世話になり、また、鳥の調査をしている方の紹介も受け、その方の撮った写真をみていただきましたが、この島での面白い季節は4月後半から5月という話をされておりました。次回は鳥見で訪問したいと思っています。



野幌森林公園

2013. 5. 12

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カルガモ、キジバト、ツツドリ、トビ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、モズ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、クロツグミ、コリ、ルリビタキ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、シメ、アオジ 以上31種

【参加者】秋山洋子、井上公雄、今村三枝子、香内 実、小西扶美枝、坂井伍一、品川陸生、清水朋子、瀬川 睦、高橋貞夫、高橋利通、高橋芳子、辻田捷紀、戸津高保、中正憲佑・弘子、中村 隆、野越広樹・ゆかり・悠作、蓮井 肇、畑 正輔、濱野由美子、辺見敦子、本間康裕、松原 寛直・敏子 以上27名

【担当幹事】坂井伍一、畑 正輔

千 歳 川

2013. 5. 19

岩見沢市 喜多 俊郎

学生時代は、山登りをしたり川下りをしたりと山や川で

過ごす時間を多く持てたのですが、周辺の野草や樹木、野鳥などを観察する興味も余裕もあまりありませんでした。

そんな中、たまたまある鳥好きの方と冬の阿寒の森を歩く機会がありました。彼の知識は鳥だけにとどまらず、樹木や森全体の生態系にまで及んでいて、森の深さを知ることができた感動と、自分には見えていない世界が見えている彼の目が素直にカッコイイと感じました。

それ以来、もっと森のことを知りたい、知識を深めたいと思うようになりました。しかし、なかなかどこから始めていいのかかわからず、行動に移せない時期が長く続きました。そこで、まずは身近な森を歩いてみようと思い立ち、近くの森を歩き始めました。まだ冬だったのでテレマックスキーを履いて1時間歩いたのが、森をじっくり観察して歩くことの第一歩だったような気がします。

まずは、1シーズン図鑑片手に朝の森を歩いてみました。花が咲いたらじっくり図鑑で調べ、鳥を見つけたらあわてて図鑑の絵と照らし合わせてみて、自分で名前がわかった時はとても幸せな気分になりました。

また、知り合いに植物や野鳥に詳しい人がいたら紹介してもらって案内してもらったり、観察会に参加しては、一人で観察しているときにはわからなかったことを教えてもらったりしている内に、ますます森歩きにはまっていったのです。

今回参加させて頂いた探鳥会。お気に入りの千歳川ということも重なって大変楽しませて頂きました。川岸を歩いた4時間ちょっとの間に観察出来た鳥の種類が44種と聞いて驚きです。一人で観察していたら到底気づかなかった種類の数です。改めてベテランの目と耳には感心いたしました。まだまだ知らないことや分からないことだらけ、もっともっと自分の目と耳を鍛えてベテランの域に少しでも近づけたらと思っています。

また探鳥会に参加させて頂きたいと思っておりますので、その時はどうぞよろしくお願い致します。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キジバト、イソシギ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワガラス、クロツグミ、アカハラ、ノゴマ、コルリ、ルリビタキ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニユウナイスズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、アオジ、クロジ 以上44種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、荒木良一、石田卓也、岩崎孝博、江坂嘉昭、大表順子、川村宣子、喜多俊郎、北川博一、栗林宏三、坂井伍一、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、高橋貞夫、高橋利通、高橋芳子、高橋良直、竹田芳範、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、戸津高保、中正憲佑・弘子、中村 隆、蓮井 肇、畑 正輔、原 美保、樋口孝城・陽子、広木朋子、本間康裕、山本和

昭、吉田慶子

以上39名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦



千歳川対岸枯れ木のクマゲラ（参加者撮影）

鵲 川 河 口

2013. 5. 26

【記録された鳥】マガモ、カルガモ、カワアイサ、キジバト、ウミウ、アオサギ、チュウシャクシギ、キアシシギ、イソシギ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上27種

【参加者】青山和正、荒川 顕・里奈、五十嵐加代子、五十嵐静江、内山純一・雅子、岡崎直子、小山内恵子、門村徳男、河合あさえ、川東保憲・知子、菊谷勝男・靖子、佐伯武美、坂井伍一・俊子、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、辻 雅司・方子、中正憲佑・弘子、ニーナ・イレバ、野田貴代子、蓮井 肇、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、鷲田善幸 以上38名

【担当幹事】門村徳男、島田芳郎

野幌森林公園（夜の探鳥会）

2013. 6. 1

札幌市豊平区 戸津 以知子

今年は今までの夜の探鳥会の場所を平和の滝から野幌森林公園へ移して行われ参加しました。今年の6月の夜は風が冷たく肌寒い日でした。大沢口から夏コースを行くと段々期待がふくらみます。クロツグミの夜用？の鳴き声もなかなか良く、キビタキもみんなの近くで飛び交い、少し遠くではアオバト、ツツドリの声もしました。夜の探鳥会なので目は勿論、特に耳を澄ませながら進みました。突然ヤマ

シギが飛び“ヤッター”と言う所でしたが、段々目も慣れ、その後何度か全員で確認する事が出来ました。

後半はライトを点灯し、空を見上げながら戻りました。昭和61年(1986)の一度だけですが、野幌森林公園で夜の探鳥会が行われたことがあります。正規の探鳥会ではなく、「夜の野幌森林公園を歩きましょう」というものでした。これに参加してフクロウの親子の声を聴いた私は、またいつかは聴ける事と期待しています。出発時間が、幾分遅くても良いかとも感じました。何に出会えるか期待の膨らむ楽しい探鳥会でした。

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、ヤマシギ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、クロツグミ、コルリ、キビタキ、ニュウナイスズメ、アオジ
以上18種

【参加者】秋山洋子、岩崎孝博、大内和憲、川東保憲・知子、木戸上哲人、工藤知美、栗林宏三、坂井伍一、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、戸津高保・以知子、富川徹、畑 正輔、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、山田稔、山本康裕
以上23名

【担当幹事】戸津高保、畑 正輔

植苗ウトナイ

2013. 6. 2

札幌市清田区 長尾 由美子

集合場所の植苗駅で、会員の方と挨拶を交わし「お久しぶりですね」と言われました。後で、何と一年ぶりの参加だったことが判り、吾ながら驚いてしまいました。無沙汰をしていますが皆さんに親しく声を掛けて戴き、アットホームな雰囲気でも楽しませてもらい感謝しております。

最初は肌寒く感じましたが、歩き始める頃には陽ざしも差してきました。道沿いに大きな蟻の巣があり、忙しく動く蟻は、人間社会の縮図の様で見入ってしまいました。少し進むと、その鳴き声を聞けばかりで、めったに見られないウグイスをレンズに捉える事ができました。

やがて、道を逸れて草原の小道に入ると、チュウヒやアオサギが飛翔していました。また、航路になっているのでしょうか、カラフルな飛行機が頭上を飛び、野鳥などに影響があるのではという思いがよぎりました。囀りだけは聞こえていたのですが、オオルリを見ている皆さんに気づき、追いつきましたが間に合わず飛び去られてしまいました。「手前の木の後ろの細い二本の木がありますよね。その左の方の木の横枝の葉のところに。少し後ろ向きかな？」と傍の方が丁寧に説明して下さいました。まだまだ修行が足りません。それでも、オオジュリンが揺れる木のてっぺんで懸命に歌っている姿をスコープに入れていただき堪能するまで見る事ができました。

まだまだ自在に探鳥がかなわない私ですが、会でのもう

ひとつの楽しみがあります。道端の野草花を観ることです。今は骨折でリハビリ中の93歳の友がムラサキケマンを見てきたと、去年話してくれました。今日は私がその花を実際に見ることができ感動しました。また、この草原に、ベニバナイチヤクソウの群落があるという友の言葉通り、一面に俯き加減に咲く可憐な姿に打たれました。つい話が横道に逸れてしまいました。

その後、美々川近くで鳥あわせをし、センダイムシクイのさえずりを聞きつつ、車座にお弁当を食べ帰路につきました。



植苗ウトナイ さえずるウグイス(参加者撮影)

【記録された鳥】キジバト、アオサギ、カッコウ、オオジシギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、クロツグミ、ノビタキ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、スズメ、ビンズイ、カワラヒワ、イカル、アオジ、オオジュリン
以上27種

【参加者】川東保憲・知子、栗林宏三、坂井伍一、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋貞夫、高橋良直、高正みちえ、長尾保秀・由美子、中正憲佑・弘子、中田勝義、畑 正輔、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、山本昌子、吉田慶子、鷺田善幸
以上24名

【担当幹事】坂井伍一、鷺田善幸

厚 別 川

2013. 6. 9

札幌市厚別区 鬼丸 順子

快晴のライラックが咲きほころ川下公園を出発してまもなく、元気よくヒバリがぐんぐん鳴きながら上昇していきました。厚別川の草原ではオオヨシキリがさえずっていますが、草丈も伸びて見つけづらいだろうと思っていたところ、木の中に出てきました。光がよく当たって赤い口の中もよく見えました。ノビタキはたくさんいて、虫をくわえて

子育てに忙しそうです。

林の中からけたたましい警戒する鳴き声がしたと思ったら、カッコウが声もあげずに2羽の小さい鳥に追い立てられ、必死に川の向こうに逃げていきました。みなさんと「托卵を企んだ」けれど、失敗したのかなと談笑しました。

イソシギも2羽仲良く橋の上流や下流をいったりきたりして、夏の到来がひしひしと伝わってきました。

スコープ持参率が高いので、初心者の人、とてもよく見せてもらえて楽しそうでした。参加者がたくさんでにぎわっているので列が長くなり、個体の確認に手まどって、何が出たのかわかるのに時間がかかりました。

暑い日でしたが、たくさんの人で見たので31種も確認できてよかったです。よく一人で来ている場所なので皆さんの反応が面白かったです。また参加させてくださいね。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、コチドリ、イソシギ、トビ、ハイタカ、アリスイ、アカゲラ、モズ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、クロツグミ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、ドバト 以上31種

【参加者】阿部真美、五十嵐加代子、井上公雄、今村三枝子、栄田吉子、大表順子、大内和憲、太田敏枝、鬼丸順子、加藤文夫・千春、川東保憲・知子、栗林宏三、桑原みは子、後藤義民、坂井伍一、品川睦生、柴田道彦、清水朋子、高橋宣子、田中 陽・雅子、田辺 至、戸津高保、中正憲信・弘子、韭澤千代、野田貴代子、畑 正輔、早坂泰夫、原美保、樋口孝城・陽子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子 以上37名

【担当幹事】品川睦生、原 美保

野 幌 森 林 公 園

2013. 6. 16

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、カッコウ、トビ、フクロウ、コゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、キビタキ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ 以上21種

【参加者】秋山洋子、荒木良一、井上公雄、今村三枝子、大賀 浩、笠井好美、数田真弓、川村宣子、後藤義民、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、高田征男、高橋貞夫、田中陽、戸津高保、蓮井 肇、畑 正輔、原田功雄、広木朋子、松原寛直・敏子、三井 茂、横山加奈子、吉田慶子 以上25名

【担当幹事】坂井伍一、横山加奈子

福 移

2013. 6. 30

札幌市豊平区 山田 由弘

札幌に単身赴任しているため、毎週ではなくても週末をアウトドアで過ごす機会が増えた今日このごろです。

先日初めて西岡公園での他の会の探鳥会に参加してツツドリを見て、以来、鳥もなかなか。また、みなさん鳴き声で鳥名がわかるようで、話を聞いているととても楽しい。今回最初に、「初めての方は」の声に、2回目なのでつい答えそびれてしまい、以後おとなしく皆さんのあとについて観察することにしたが、先頭から3番目くらいが良いようである。先頭はリーダーで、鳥を見つけ、見る準備を教えてくれるし、また、まわりで鳥名を言って、なんだかんだと言ってくれるし、楽しいものである。西岡と林相が異なるのか、また、時期が1ヶ月くらい違うのか、鳥の種類も異なるのがおもしろい。夏場はエゾハルゼミに鳥の声が邪魔されるとのことで、これからは難しい様なことを聞いた。早朝が良いのかもしれないが…。超ビギナーなので、この前入手した2冊のガイドブックだけでは少し難しいかも。まあ気長に続けていければと思っています。

札幌市中央区北2条西1丁目に勤務で、月2回くらい函館の自宅にもどる生活をして、新幹線建設を全国的にやっている、もうすぐ定年のおじさんです。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、カッコウ、オオセグロカモメ、トビ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、ウグイス、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、コムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上27種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、荒木良一、今村三枝子、五十嵐優幸、岩崎孝博、大橋 晃、笠井好美、加藤文夫・千春、川村宣子、川東保憲・知子、品川睦生、高橋貞夫・芳子、田中 陽・雅子、中正憲信、辻 雅司・方子、戸津高保、蓮井 肇・敏恵、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、山田由弘、山本和昭、横山加奈子・吉中宏太郎 以上34名

【担当幹事】田中 陽、辻 雅司

野 幌 森 林 公 園

2013. 7. 14

【記録された鳥】キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キビタキ、クロツグミ、オオルリ、ホオジロ、アオジ 以上17種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、大表順子、笠井好美、加納喜久江、川村宣子、後藤義民、坂井伍一、品川睦生、杉田範男、高橋きよ子、富永マサエ、長尾由美子、畑 正輔、早坂康夫、樋口孝城、真壁スズ子、松原寛直・敏子、山本昌子、山本康裕、村上茂夫、横田さえ子、横山加奈子、

吉田慶子、渡会やよひ

以上26名

【担当幹事】後藤義民、坂井伍一

※2013. 5. 6 の藤の沢は雨天のため中止となりました。



【宮島沼】2013年9月29日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。

マガンのほかにも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時には猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。湖畔から沼を見るだけで移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：午前10時

交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発(月形行)

または月形駅前発(岩見沢行)

大富農協前下車 徒歩10分

【野幌森林公園】

2013年10月13日(日)、11月3日(日)、12月8日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：夕鉄バス 新札幌駅前発(文京通西行)

大沢公園入口下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅前発(文京台循環線)

文京台南町下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2013年11月10日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木に止まっているかもしれません。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、

同じ場所で昼食をとることになります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 午前9時30分

交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

ウトナイ湖下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時(土日、祝祭日を除く)

鳥 民 だ よ り

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。価格は1部1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌森林公園探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915

小堀 011-591-2836

◆会員増にご協力を◆

今年4月1日現在の会員は、個人会員270名、家族会員は41家族、団体会員は3団体となっています。5年ほど前までは毎年会員数減少が続いたのですが、このところは、その傾向が収まり、ほんのわずかですが増加傾向にあります。とはいえ、安心できる状況では決してありません。お友達などをお誘いし、会員増に是非ご協力下さい。

【新しく会員になられた方々】

笠井 好美 札幌市厚別区

水本 絵夢 松山郡厚沢部町

長谷川寿啓 札幌市東区

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>